

## 枚岡伸線業地域における工場跡地の利用形態

河 原 典 史\*

### I. はじめに

わが国における1950年代後半から70年代前半にかけての高度経済成長は、工業地域の激変をもたらした。その後のオイルショックや円高ドル安傾向なども、日本経済に多大な影響を与えた。これは工業地理学の研究課題・対象にも変化をもたらしたことは言うまでもない。とりわけ、「地方の時代」と提唱された1970年代以降では、地場産業が産業把握の新たな概念として定着し、多くの研究が蓄積されてきた<sup>1)</sup>。

地場産業に関する地理学的研究では、その歴史的な展開過程を解明するにあたって、労働力と生産流通体系に関心が集まってきたように思われる<sup>2)</sup>。工業それ自体の問題にとどまらず、大都市内部の零細工業集中地区において、住工一体の産業地域社会が形成されているという竹内淳彦の指摘<sup>3)</sup>は、工業と地域社会との問題を論じるうえで極めて重要である。

産業地域社会を形成する地場産業の場合、主たる産業の構造変化は経営者、従業者やその家族だけでなく、他の住民にまで影響をおよぼす。かかる点から、衰退する地場産業地域における工場跡地の利用には、居住環境の整備をはじめとするさまざまな問題に、細心

の注意が払われねばならないであろう<sup>4)</sup>。そこで本稿では、東大阪市枚岡の伸線業地域<sup>5)</sup>を事例として選定し、工場およびその関連施設の跡地利用について報告する。

枚岡における伸線業では、鉄線や真鍮線、銅線などの非鉄金属が取り扱われている。そのうち、量の多寡に関わらず鉄線に関係する伸線業者は60%に達する。さらに、これらに関連する輸送業者も存在する。

研究方法については、既存の文献を用いて伸線業地域の形成過程を明らかにする。その際、できるかぎり資・史料を併用する。次に、伸線工場跡地の利用形態について考察する。

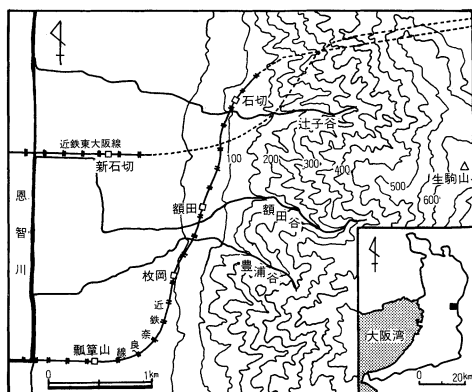
### II. 伸線業地域の形成過程

#### (1) 水車動力の利用

近世当初から、生駒山地の西側斜面には多くの水車が存在し、精米・製粉などに使われていた。集水面積が大きく、流量の多い渓谷に設置された水車は、やがて工業にも利用されるようになった<sup>6)</sup>。

かかる渓谷のひとつである豊浦谷では、寛永年間(1624~44年)から薬種や胡粉の粉末加工に水車が利用され<sup>7)</sup>、また綿繰や綿実油・菜種油絞りに用いられた<sup>8)</sup>。その後、天保年間(1830~1844年)になって、車屋利兵衛なる人物がかんざしの足を豊浦谷の水車を利

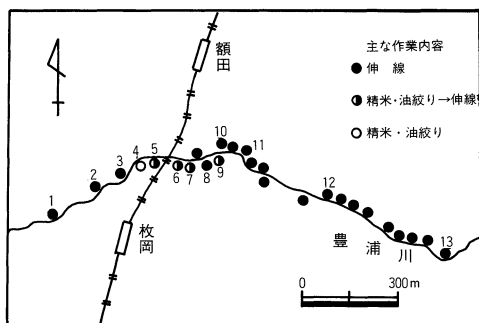
\* 立命館大学大学院



第1図 東大阪市枚岡付近の概観

用して製造しはじめた。伝承によると、豊浦谷における水車による伸線業は彼に始まると言われている。その要因として、水質が針金の洗浄に適していたことも指摘されている<sup>9)</sup>。その後、水車は専ら伸線に利用されるようになった(第2図)。

水量・水質にとどまらず、材料ならびに製品の輸送の容易さ<sup>10)</sup>もまた、水車の設立条



操業期間 (判明分のみ)

- |             |              |
|-------------|--------------|
| 1. 大正期→昭和初期 | 8. 大正期→昭和期   |
| 2. 大正期→昭和初期 | 9. →昭和初期     |
| 3. 大正期→昭和初期 | 10. 明治期→昭和初期 |
| 4. 江戸期→昭和初期 | 11. →第2次大戦期  |
| 5. 江戸期→昭和初期 | 12. 明治期→大正期  |
| 6. 江戸期→昭和中期 | 13. 明治期→昭和初期 |
| 7. 江戸期→昭和6年 |              |

第2図 豊浦谷の水車場跡

(文献7の152～153頁ならびに付図より作成)

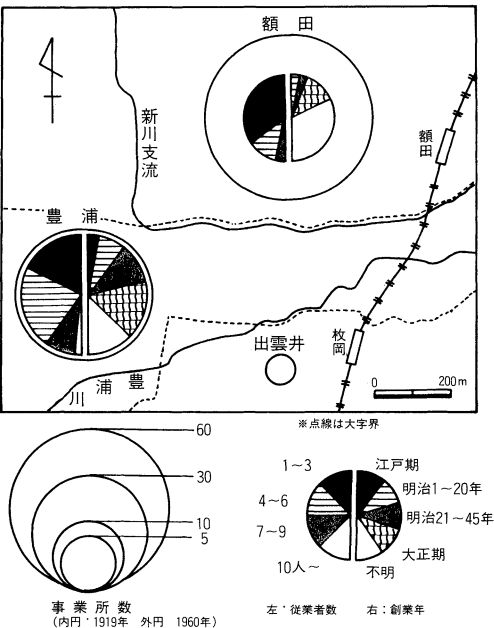
件である<sup>11)</sup>。豊浦谷に沿う暗越奈良街道と東高野街道とが交差する枚岡<sup>12)</sup>は、水車を利用した伸線業の発展に適した条件を備えていたわけである。

## (2) 伸線業地域の拡大

1904(明治37)年に勃発した日露戦争による軍需の拡大によって、枚岡の伸線業は生産の増大を迫られるようになった<sup>13)</sup>。しかし、伸線業の動力を水車に依存する限り、工場は谷筋に立地せざるをえなかった。渓谷部よりも扇状地性の低地部に工場を設置する方が、輸送に関する限り有利であることは明らかである。しかしながら、水車の立地移動にはひとつの障害が存在した。それは農業用水権の制約にほかならない<sup>14)</sup>。したがって、立地移動の推進には、動力自体の革新が求められた。

1907(明治40)年頃、吸入ガス発動機を用いて伸線が行われるようになると、低地部への工場の立地移動が促進された<sup>15)</sup>。さらに、1914(大正3)年の大軌電鉄(現在の近鉄奈良線)の開通に関連し、その前年から、枚岡に電力が供給されるようになった<sup>16)</sup>。これを契機に伸線業者は電動機を導入するようになり、工場の低地部への立地移動が顕著になった。1919(大正8)年には、51事業所が電動機を導入するようになり、1事業所が蒸気、10事業所が水車、5事業所が水車と電動機を併用して操業した<sup>17)</sup>。

低地部における伸線工場の立地は、豊浦谷沿いに限定されなくなり、大字豊浦(旧豊浦村、以下豊浦地区)から、北接する大字額田(旧額田村、以下額田地区)にまで広がりをみせた(第3図)。1919(大正8)年には、豊浦地区35事業所、額田地区17事業所、計52事業所者にまで伸線工場は増加した。また、



**第3図** 大字別の伸線工場数の変化  
(大阪府内務部『大阪府下商工業者一覧』1920、  
枚岡針金工業会『躍進する鉄線工業』1960より  
作成)

従業員数についてみると、3人以下の従業員の占める割合は、豊浦地区の伸線工場が34%であるのに対し、額田地区では80%を超える。したがって、後発の額田地区では事業所の規模はより小さいことがわかる。

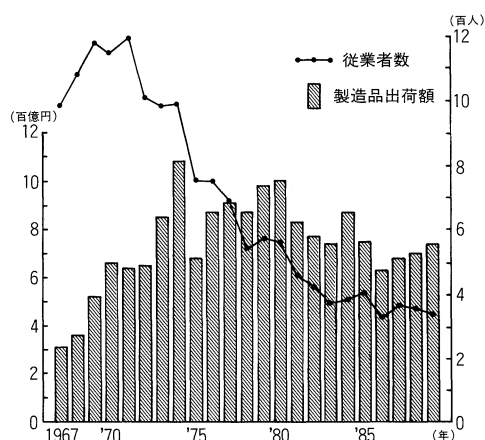
1914（大正13）年に勃発した第1次世界大戦は針金の需要拡大をもたらし、枚岡の伸線業界もまた好景気で潤った<sup>18)</sup>。このように、電動化、大馬力化によって、枚岡の伸線業は発展をみることになった。また、大量生産化にともない輸送手段も牛車からトラックへ転換され始めた<sup>19)</sup>。

### Ⅲ. 伸線業地域の再編成

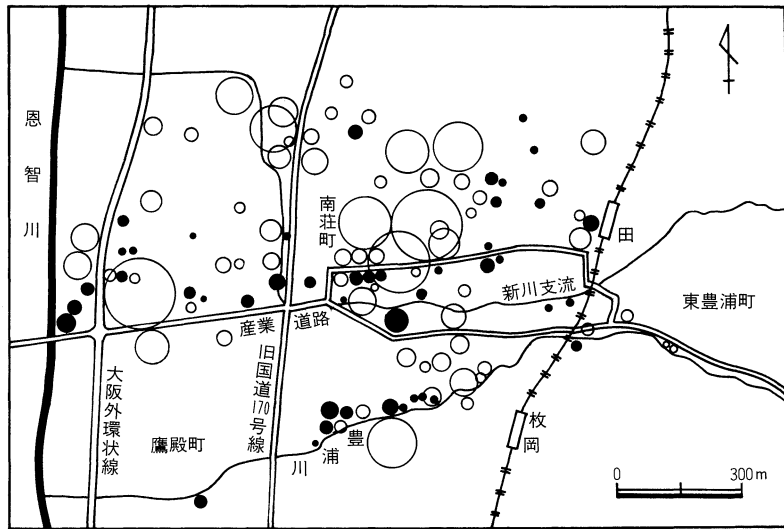
### (1) 伸線工場の立地特性

昭和初期にはいり、一連の戦争によって軍需産業としての伸線業は飛躍的な成長をみた。1927（昭和2）年には事業所60・従業者数225人であったが、1939（昭和14）年には同92・772人を数えた<sup>20)</sup>。1935（昭和10）年にいわゆる「産業道路」（旧国道308号線）が完成し、市場の大阪市と枚岡を結ぶ輸送路も整備された。第2次世界大戦後には、大型トラックの普及により、枚岡における一部の道路も拡張された。

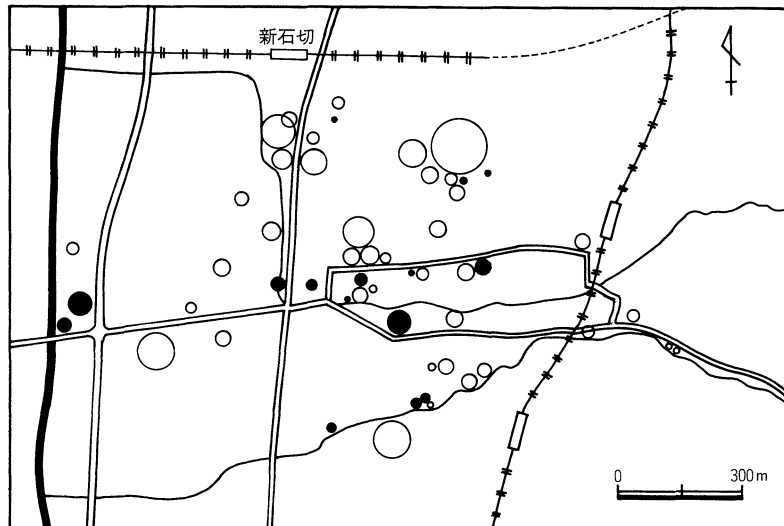
その後、豊浦地区に南接する出雲井地区にまで伸線業地域は拡大した（第3図）。1970（昭和45）年頃、枚岡の伸線業は最盛期を迎える（第4図）。戦後における伸線工場の立地は、一定の場所に集積する傾向がみられる（第5図）。伸線過程において洗浄用水を必要とする<sup>21)</sup>ため、低地部においても河川沿いに工場は立地する。また、輸送条件に恵ま



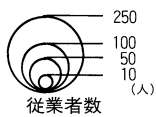
第4図 東大阪市の伸線業に関する従業員数・製造品出荷額の推移  
(東大阪市統計課資料より作成)



(a) 1977年



(b) 1990年



○ 鉄線

● 二次加工品

第5図 伸線工場の分布  
(1977年：東大阪商工会議所、1990年：枚岡伸線工業会資料より作成)

第1表 大規模工場における従業者数の推移の事例

	系 列	主要生産品	従 業 者 数 (人)				移転・廃業後の主な土地利用
			1970	1977	1981	1990	
A	住友金属	鉄線 釘	604	241	—	—	駐車場 空地
B	—	鉄線 ボルト	413	—	—	—	マンション (11階建110戸・4階建84戸)
C	八幡製鉄	鉄線 釘	306	243	150	—	マンション建設中
D	神戸製鋼	鉄線	292	182	102	—	マンション (11階建154戸・7階建70戸)
E	富士製鉄	鉄線 ボルト	136	112	80	67	
F	富士製鉄	鉄線 釘	112	87	54	36	
G	住友金属	鉄線 溶接棒	108	125	65	43	

(東大阪商工会議所・枚岡伸線工業会資料および現地調査より作成)

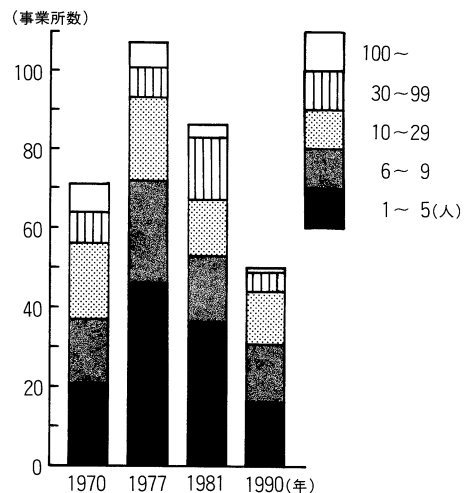
れた、産業道路と大阪外環状線の交差点付近には、比較的大規模な工場が建設された。この周辺には貸工場を利用した他の金属工場も多くみられる<sup>22)</sup>。とりわけ、額田地区に含まれる南莊町では田畑が残存していたため、この地に伸線工場の集積が生じた。その要因のひとつとして、江戸期より額田墓地がここに置かれていた<sup>23)</sup>こともあげられよう。すなわち、他地区に比べて宅地化の進展が遅れたと考えられる。なお、水車動力による伸線業が行われていた、かつての中核地区の豊浦谷には、電力を用いた小規模な工場がわずかに存在するにすぎない。

## (2) 伸線業の衰退

近年におけるアルミニウムやステンレスなどの普及による建築用材の変化は、鉄線、釘、ボルトなどを生産する伸線業に大きな影響を与えた。また、1974（昭和49）年の第1次オイルショック、それに続く1978（昭和53）年の第2次オイルショックによって、枚岡の伸線業界も不況に陥った。さらに、1985（昭和60）年以降の円高ドル安傾向、ならびにNIEsの急成長は製品の海外輸出を鈍化させ

た<sup>24)</sup>（第4図）。

第1次オイルショック以降、枚岡の伸線業界の状況は、鋼材から鉄線や釘、レールなどに一次加工を行う大規模工場へ多大な影響を及ぼした。このような一部の限られた企業は、1949（昭和24）年頃から大手の鉄鋼資本の系列に組み込まれることから免れなかった。すなわち、神戸製鋼系に3事業所、八幡製鉄系



第6図 規模別伸線工場数の推移  
(東大阪商工会議所 枚岡伸線工業会資料より作成)

に2事業所、富士製鉄系に2事業所、住友金属系に3事業所が組み込まれたのである<sup>25)</sup>。しかしながら、そのうちの4事業所は経営不振から立ち直れず、規模を縮小して他地域へ移転するか、もしくは廃業に追い込まれた(第1表)。そして、残った事業所は従業者の削減を余儀なくされた。その結果、1970(昭和45)年当時、100人以上の従業者からなる大規模工場は8事業所を数えたが、現在ではわずか1事業所にすぎない(第5・6図)。

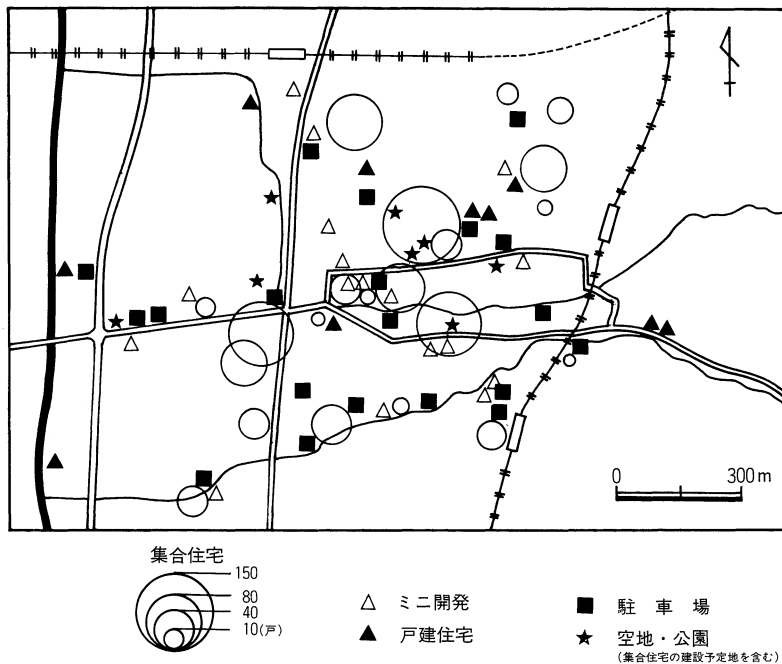
#### Ⅳ. 伸線業関連施設の跡地利用

工場の移転・廃業は従業者数の減少だけにとどまらず、その跡地利用にも影響をおよぼした(第7・8図)。零細な小規模工場の場合、

その跡地に経営者の戸建て住宅が建てられることが一般的である。

このような小規模工場とは別に、内職としてピンやハンガーの箱詰めなどに携わる世帯も最盛期には存在した。それらは伸線業の衰退とともに、休・廃業におこまれたことは言うまでもない。しかし、内職の場合、作業場は一般家屋内に設けられることが多かったため、休・廃業後も土地利用の著しい変化はない。

一次加工に携わる大規模工場は広大な敷地からなっており、工場の建物以外に鋼材・廃材置場やトラック用駐車場などの関連施設を有する。そのため、これらの移転・廃業後の土地利用は著しく変化した。跡地は新しく来住した住民のための賃貸の駐車場や公園だけでなく、住宅用地にも転用された。建築され



第7図 伸線業関連施設の跡地利用

(住宅地図・現地調査より作成)

る住宅は「ミニ開発」と呼ばれる小規模な戸建て住宅と、マンションとに大別される。敷地の点からみても、後者は大手の鋼材資本の系列にあった大規模工場の跡地に建設されることが多い。なかには、10階建て・100戸以上の入居世帯からなるマンションも散見される（第1表）。現在も、3か所で高層マンションの建設が進行中である。

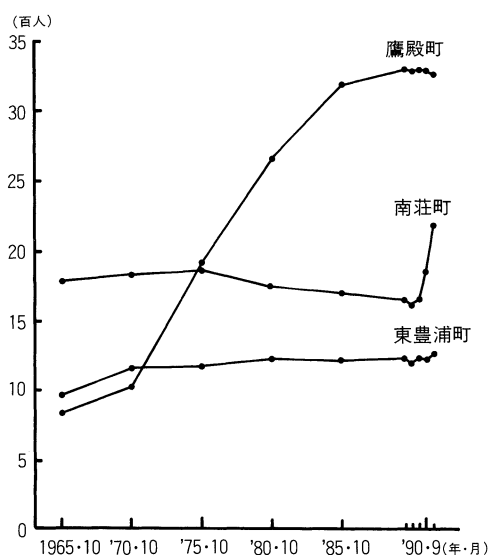
工場敷地だけが住宅地に転用したわけではない。枚岡伸線業地域において、重要な役割を果たしていた鉄線専門の輸送業者の動向も見逃すわけにはいかない。枚岡の伸線業にお

いて、材料・製品の輸送は、通常は専門の輸送業者にゆだねられる。そのため、業界の不振にともない、鉄線専門の輸送業者は、1968（昭和43）年に24事業所を数えたが、1978（昭和53）年には12事業所、1991（平成3）年には9事業所と、減少するに至った<sup>26)</sup>。なかには、鉄線専用から大手宅配業の下請けに転業する輸送業者もみうけられる。このような規模縮小により生じた空地、および廃業後の跡地はおもに住宅に転換されている。

このような土地利用だけが変化をきたしたわけではない。住宅の増加は枚岡の人口にも



第8図 南荘町における伸線工場の跡地利用—1977～1990年—  
(住宅地図・現地調査より作成)



第9図 町別人口の推移  
(東大阪統計課資料より作成)

影響をおよぼした(第9図)。1970(昭和45)年から1985(昭和60)年にかけて、人口増加をみた豊浦地区の鷹殿町に比べて、伸線工場の集積する南荘町のそれは減少傾向を示していた。そして、豊浦谷の溪谷部にあたる東豊浦町では、人口はわずかながらも増加していた。しかし、1989(平成元)年頃から、南荘町では急激な人口増加が生じた。明らかに、これは前述の住宅、とりわけマンションの建築ラッシュによるものである。

なお、最盛期の頃、地域内には従業者を対象とした理髪店、公衆浴場や食堂もみられた。1960(昭和35)年頃には、業者用の宿泊施設まで存在していた。伸線業はこのようなサービス業までも吸引するものであった。

伸線業の衰退はその経営者や従業者に影響を及ぼしただけでなく、来住者の増加をもたらした。工場の転・廃業やその跡地の宅地化などは、伸線業を中心とする産業地域社会を

変質させるものであったといえよう。

## V. これからの枚岡—むすびにかえて—

本稿では、東大阪市枚岡の伸線業地域の変化、とくに伸線業関連施設の跡地利用について論じた。以下、明らかになった諸点を整理してみよう。

枚岡における伸線業の歴史は、豊浦谷において水車動力を利用していた江戸末期に遡る。大正期にはいり、材料・製品の輸送に便利な低地部に伸線工場が立地移動するようになった。この要因のひとつに、大軌電鉄の開通にともなう電力供給の開始が挙げられる。また、輸送道路の整備と社会的要請にともなって、伸線業は発展をみる。そして、伸線工場は次第に河川沿いの空閑地に集積するようになる。

1970(昭和45)年頃、枚岡の伸線業は最盛期を迎える。その後、建築用材の変化やオイルショック、円高ドル安傾向は当地に不況をもたらした。この不景気は、零細で小規模な伸線工場よりも、大手鉄鋼資本の系列に組み込まれた大規模工場に影響を与えた。すなわち、従業者の大量削減だけでなく、移転・廃業に追い込まれた事業所もみられたのである。伸線業関連施設の跡地は、主に住宅に利用されている。とりわけ、最近におけるマンションの建設は人口の急増を招いている。

最後に、現在の枚岡における伸線業地域が抱える問題点を言及することによって、本稿のむすびにかえたい。従来から指摘されてきたのは、廃液処理や騒音などの公害対策の必要性である<sup>27)</sup>。これらの点で、伸線業と地域住民が必ずしも協調関係にあったわけではない。

さらに、近年における新住民の増加は住民相互間にも軋轢を生みつつある。まず第1にマンション建設にともなう日照権の保護問題がそれにあたる。第2に眺望に関わる問題が生じている。旧来からの住民は枚岡の東に位置する生駒山に対して親しみを感じてきた<sup>28)</sup>。しかし、マンション建設の結果、「生駒山が隠れる」あるいは逆に「大阪平野の夜景が見えない」といった理由で建設反対運動が起こった。

伸線業の衰退にともなう工場および関連施設の住宅への転換は、産業地域社会の変質を物語る。そして、工場および関連施設の跡地利用については居住環境の整備が第一義的に尊重されねばならないであろう。

〔付記〕本稿の作成にあたり、日下雅義教授をはじめとする立命館大学地理学教室の諸先生方に御指導いただいた。なお、本稿は河島一仁助教授が引率・指導された巡検「生駒山地西麓における水車利用」に参加した際のフィールドノートに、その後の補足調査を加えたものである。

資料収集において、東大阪市史編纂室、東大阪市統計資料課、東大阪商工会議所企画調査課、枚岡伸線工業会をはじめとする多くの方々にお世話になりました。末尾ながら、ここに記してお礼申し上げます。

## 注

- 1) 李 哲雨「地場産業研究の意義と課題」、人文地理43-2、1991、143～165頁。
- 2) 板倉勝高『地場産業の発達』、大明堂、1981、53～93頁。
- 3) 竹内淳彦「大都市における工業集中地区の構造—東京を中心として—」、経済地理学年報19-2、1973、40～57頁。
- 4) 伊藤善文「中小工場の分布とまちづくり—神戸市兵庫区の住工混合地区を例にして—」、兵庫地理28、1983、26～33頁。上野和彦「東京都墨田区における中小工場の立地移動—大都市工業研究ノート—」、経済地理学年報33-2、1987、130～141頁。
- 5) 本稿で用いる「枚岡」は、旧豊浦村・旧額田

村・旧出雲井村からなる地域とする。なお、東大阪市の伸線工場は、本稿で取り上げた枚岡のほか、市域西北部の高井田にもわずかに集積している。

- 6) 和田俊二「生駒山脈西斜面に於ける水車の地理的研究」、地理論叢9、1937、223～261頁。
- 7) 辻子谷では水車は薬種、胡粉、マンガンの粉末加工や、綿実油、菜種油の生産などに利用された。額田谷の水車も、そのほとんどが漢方薬を主とする粉末加工利用されていた。出水力『水車の技術史』、思文閣、1987、102～103、115頁。
- 8) 大阪府商工経済研究所「中小工業の発展形態—一枚岡の「釘、針金」と貝塚の「ワイヤーロープ」による実証—」、経研資料173、1957、92頁。
- 9) 阪上敏男『枚岡伸線工業発達史』、河内郷土研究会、1959、2～3頁。ただし、車屋利兵衛が水車動力を利用して伸線を始める以前より、すでに枚岡では伸線を業とする職人が存在していた。また、寛永7（1795）に没した初代米屋庄助（車屋庄助）が、豊浦谷において最初に水車精米を行ったとされている。前掲7）112～116頁。
- 10) 明治期における枚岡の伸線業者は大阪市内の業者と取引を行っていた。「明治初年大字豊浦亡今中利八、同新九郎等ノ共同シテ大阪市南區安堂寺町通池田屋ナル者ト契約シテ鐵針金ノ製造ニ着手セルヲ以テ嚆矢トス」大阪府内務部『農家副業成績品展覧会報告』、1915、385頁。
- 11) 前掲6）242～243頁。
- 12) 大阪府『大阪府史 第四編』、1903（1970復刻）、1184～1185頁。
- 13) 前掲9）3頁。
- 14) 安永10（1781）年の『字地藏谷川筋 河内郡六万寺村四状村 山裾両村請水車六輛名簿帳』に次のような箇所がある。「水車ニ付用水自然と減水（中略）一番ヨリ五番迄五輛之車年々夏至以後用水時節候間其御村ヨリ御指図有之次第」枚岡市史編纂委員会編『枚岡市史 第四巻史料編（二）』、1976、573～575頁所収。
- 15) 前掲7）128頁。
- 16) 大阪電気軌道株式会社『大阪電気軌道株式会社30年史』、1940、426～430頁。
- 17) 大阪府内務部『大阪府下商工業者一覧』、1919、461～465頁。
- 18) 前掲9）4～5頁。
- 19) 前掲9）5頁。なお、聴き取り調査によると、牛車輸送は昭和30年頃までおこなわれていた。
- 20) 古川 清「生駒の集落 枚岡」（藤岡謙二郎編『生駒山地の人文地理』、1961、大阪教育図書）、89～92頁。
- 21) 戸外に放置された鋼材の錆を落とすため、希

- 硫酸が用いられる。水洗いの後、中和させるため、鋼材は石灰水に漬けられる。その後の伸線過程においても、この工程が繰り返される。なお、1968（昭和43）年に東大阪市は専用排水管と廃液処理センターを設置した。
- 22) 小口悦子・米村典子・藤田明子「工業地帯発生の過程における貸工場群—東大阪市における形成—」、地理学評論46-12、1973、811～825頁。
- 23) 天保15（1844）年三月の『額田村明細帳』に次のような箇所がある。「墓所九畝五歩境内火屋桁行四間 梁行式間 墓守式件」東大阪市史編纂委員会『河内国河内渋川群村明細帳—東大阪市史資料 第6集（三）—』、1978、334～339頁所収。
- 24) 1985（昭和60）年当時、東大阪市の伸線業で輸出品を取り扱っている事業所は、36社を数えた。1984（昭和59）年における輸出額は213億1586万円であり、同市の全出荷額の20.1%を占めていた。また、円高ドル安による影響を受けたと答える事業所は65.5%を示す。東大阪市・東大阪商工会議所『東大阪主要地場産業の経営者の意識』、1986、32～34頁。
- 25) 前掲8）33～39頁。
- 26) 職業別電話帳、住宅地図ならびに現地調査より確認した。
- 27) 藤田明子「伸線の町 枚岡」、（板倉勝高編『地場産業の町（下）』、古今書院、1988）、215～225頁。なお、旧・枚岡伸線工業会は前述した廃液処理センターの建設・利用にあたって組織されたものである。しかし、東大阪市の財政上の問題から、1988（昭和63）年より廃液処理は各事業者に任されることになり、旧・枚岡伸線工業会は解散した。現在の枚岡伸線工業会は親睦・任意団体として組織されているにすぎない。
- 28) 生駒山系は信仰対象の場、滝業の場、籠りの場、巫祭の場、大衆の参詣地、現世利益市場などとしての、さまざまな宗教的諸機能を有している。飯田剛史「生駒における信仰の諸機能」、（宗教社会学の会編『生駒の神々—現代都市の民俗宗教—』、創元社、1985）、22～36頁。